



府中市美術館

お話を伺いました

府中市美術館
副館長補佐 兼 学芸係長
鎌田 享さん

2Fには常設展用と企画展用の展示室がある(上)。1Fの美術図書室には約5万冊の図書や雑誌を収蔵。美術書のほか児童書もあり来館者が自由に閲覧できる(下)。

緑あふれる都立府中の森公園にある文化芸術の拠点、府中市美術館。1990年代に「府中らしい美術館のあり方」について市民参加で議論を重ね、2000(平成12)年10月に「生活と美術」美と結びついた暮らしを見直す「美術館」をテーマに開館しました。気構えずに日頃から美術を楽しむでもらいたい、カフェやミュージアムショップ、市民ギャラリー、美術図書室などがある1階は、誰でも自由に出入りできる造りになっています。暮らしと美術をつないできた20年以上の歩みや現在の取り組みについて、副館長補佐兼学芸係長の鎌田享さんに伺いました。

日常風景の中にある美術館の役割

「美術館は日常の生活から少し気持ちを切り離せたり、いつもと違う視点を持つことができる場所だと思います。じっくり作品を鑑賞しなくても、まずは気軽に足を踏み入れていただいで、美術を身近に感じてほしい、楽しんでもらいたい」というのが当美術館のコンセプトです」と鎌田さん。1階にはアーティストが制作活動をする姿を見ることができ公開制作室もあり、2〜3か月をかけて完成する制作の過程を繰り返し見にくる来館者の姿も珍しくありません(左下コラム参照)。

また教育普及活動として学校教育や社会教育機関と連携し、鑑賞教室やワークショップ開催などにも積極的に取り組み、幅広い年齢層が日頃から美術に親しみ楽しめる環境を整備しています。

2階の企画展示室では、年間5〜6回、国内外の様々な美術をテーマにした、府中市美術館オリジナルの

暮らしのなかに美術を 散歩の途中で 気軽に立ち寄る美術館



展覧会が開催されます。府中市美術館の企画の特徴について伺うと、「必ずしも世界的に有名な作家の作品や珍しい作品を展示するというだけではなく、これまでにない視点を提供することで、ここでしか観ることのできない展覧会になっている」とのことです。それまでアカデミッ



清水登之《チャイルド洋食店》
1924年

クで敷居の高いものと捉えられがちだった江戸時代の絵画を、「かわいい」という切り口で紹介したユニークな企画展(※)など、7名の学芸員がそれぞれの研究や調査を踏まえたオリジナルの企画を立て、展覧

作品誕生のプロセスが見られる 府中市美術館の「公開制作室」

府中市美術館の特色の一つである、アーティストの作品制作が見られる「公開制作室」。アーティストが美術館に通い、ガラス張りの公開制作室で2〜3か月をかけて作品を仕上げていきます。展覧会で飾られる美術作品がどうやってつくられるのか、アーティストはどんなことを考えながら制作を進めていくのか。壁に飾られた作品を観るだけではわからない制作の過程を垣間見ることができる、府中市美術館の開館以来続く貴重な取り組みです。



開催中の公開制作

spoken words project

デザイナーの飛田正浩が率いるファッションブランド、スポークンワーズプロジェクト。ワークショップや展示を通して、ファッションと美術の関係を問います。

2022年7月23日(土)〜12月4日(日)
※作家の来館は期間中不定期です。



会を運営しています。開館から20年以上が経ち、そうした府中市美術館の特徴が広く認知されるようになり、最近では近隣在住者はもちろん、都心部や地方などからも多くの来館者が訪れるといえます。社会の中での美術の意義について鎌田さんは、「美術があるのは、社会の中の隙間や余裕の部分」と話してくれました。「効率化が優先される社会や生活の中で、人によっては美術は憩いの場だったり新たな視点を得られる機会だったりするかもしれませんが、そうした余裕がない世界では、システムも人間もちょっとしたきっかけで壊れてしまう。そういう意味では、美術や美術館は生活を支えるちょっとした隙間や余白の1つとして、社会の中にあるべきものなのではないでしょうか」

※2013(平成25)年3月9日〜5月6日開催
「かわいい江戸絵画」展

学芸員さんに
聞く!

美術作品は どうやって観たらいいの?

「自由に楽しんで観て」と言われても、その楽しみ方がわからないという方も多い「美術鑑賞」。府中市美術館の学芸員でもある鎌田さんにアドバイスをいただきました。

「まずは、たくさん観てください」

「たくさん展示を観て『なんだか面白いな』と思うものや、ほかの作品よりもちょっと長く観ていられるものを見つけてください。それを繰り返していく中で、自分が面白いと感じるポイントや、いいなと思える作品の数も広がっていくと思います」

